

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：42671

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07393

研究課題名(和文) 共通語としての英語によるディスカッションの研究：グローバル時代の英語教育に向けて

研究課題名(英文) A Study of the Participation of Meetings in ELF and its Implications

研究代表者

瀧野 みゆき (Takino, Miyuki)

立教女学院短期大学・現代コミュニケーション学科・専任講師(任期制)

研究者番号：00777930

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主な成果は、共通語としての英語によるディスカッションに参加・貢献するための課題の理解、ディスカッション参加者の視点からの学びの分析、「共通語としての英語」を実践的に使えるようになるための学習プロセスの仮説モデルの提示の3点である。国際会議等の非参与観察と質的インタビューによって、日本人参加者が共通語としての英語によって行われる会議に効果的に参加、貢献する際の課題と対応するための学びのプロセスを分析し、経験学習理論(Kolb, 1984)を応用してモデル化した。これらの成果をもとに、日本の高等教育で英語のディスカッションスキルを教えるための教育的示唆を考察した。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the participation in meetings conducted using English as a Lingua Franca (ELF). The contribution of the study is summarised into three points: 1) Understanding the challenges faced by Japanese people participating in such meetings, 2) Analysing the process of how Japanese participants develop their English skills to actively speak and listen in such meetings, and 3) Modelling the learning process of the pragmatic English skills of these participants based on the experiential learning theory (Kolb, 1984).

Using the data from nonparticipant observation of ELF meetings and qualitative interviews of Japanese ELF users, this study analysed their challenges and the learning process of participating in ELF meetings. Based on these findings, the author proposed educational imprecations to Japanese higher education, on how to teach students to actively participate in meetings using ELF.

研究分野：応用言語学

キーワード：共通語としての英語、ELF、ビジネス共通語としての英語、BELF、国際会議、ディスカッションスキル、経験学習理論、英語教育

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進む中、多様な人々がコミュニケーションをするために、英語が世界で広く使われるようになってきている。このような「第一言語や母語が異なる人がコミュニケーションを図るための伝達手段として使われる多様な英語」(Seidlhofer, 2011) を、「共通語としての英語」、または English as a Lingua Franca (以下 ELF と略称) とよび、その特徴を探求する研究が進んでいる (Jenkins, Cogo & Dewey, 2011)。ELF 研究の中でもグローバル化が顕著なビジネスにおける「ビジネス共通語としての英語」(以下 BELF と略称) では、仕事を遂行することを主目的として実用的な英語の使い方が広くおこなわれている (Louhiala-Salminen, Charles, & Kankaanranta, 2005)。日本のビジネスパーソンの間でも、多様な言語背景をもつ人とのコミュニケーションツールとしての BELF の使用は広がり、日本人は様々な課題に直面している (Takino, 2016)。

一方、多様な国籍の ELF ユーザが意見を交わし意思決定をする国際的な会議においては、ノンネイティブ ELF ユーザが、往々にしてネイティブ英語ユーザに比べ効果的な参加が難しいと報告されている (Knapp, 2002; Rogerson-Revell, 2008)。日本人の ELF ユーザも、仕事上の英語の会議に参加する際に多くの課題に直面している (Takino, 2016; JECET EBP 調査研究特別委員会, 2015)。

しかし、ノンネイティブ ELF ユーザが、国際会議に参加する際の課題にどう対処しているか、そのために必要な英語力をどのように学んでいるかという点については研究が進んでいない。このような状況にかんがみ、会議やミーティングに効果的に参加する英語力やディスカッションスキルを、日本の ELF ユーザがどのように学ぶかを調査し、さらには日本の高等教育でディスカッションやミーティングのスキルをどのように教えると効果的かという教育的示唆を考察することの必要性に注目するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、国際会議で日本人の多くが直面する課題を理解し、より効果的に参加するための英語力を学んでいく過程を分析して、その成果をもとに、日本の高等教育の英語教育への示唆を探ることを目的とする。

国際会議とは、グローバル社会の政治やビジネスなどの分野で重要な意思決定の場となる、多国籍の人が話し合いながら様々な意思決定を行う場を指す。本研究では、まずこれらの会議に効果的に参加し、貢献するために、日本人の多くがどのような課題に直面するかを理解しようとした。このために、国際会議の現場を非参与観察し、参加者にインタビューを行った。

会議に効果的に参加する英語力を学ぶ過程

については、頻繁に英語の会議に参加する日本のビジネスパーソンに、自らの英語を使ってきた経験を振り返り、どのような課題を意識し、どのように学んできたかを聞き取ることで、ELF ユーザの視点から、学びのプロセスの理解をめざした。

さらに、これらの学びの過程の理解・分析をもとに、日本の高等教育においてどのようにディスカッションスキルやミーティングに参加する英語力を教えると効果的か、教育的示唆を考察した。

3. 研究の方法

本研究は、ELF による英語のディスカッションの現場の非参与観察と、英語のディスカッションや会議の経験を積んだビジネスパーソンへの質的インタビューの、2つの異なる視点から収集したデータを複合的に分析することで行った。

28年度の6か月間には、主に国際会議の現場の非参与観察とこれらの会議の参加者への質的インタビューを行った。ELF の会議の現場としては、機密保持等の制約が少ない、大学生を中心とした国際会議を対象とした。英語で行われる模擬国連や国際会議をまず日本で数件非参与観察したのち、シンガポールで行われた模擬国連や国際会議を観察し、非参与観察は計約 60 時間となった。日本で観察した会議はすべて日本人参加者が過半数を占める一方、シンガポールで観察した会議では日本人は非常に少なかった。また、参加人数が比較的多く発言方法がフォーマルな模擬国連と、少人数で自由に発言できる国際会議と、性格の異なる会議を観察することで、会議の形態や参加者の違いによる、日本人参加者の感じる課題の違いを観察・分析することができた。日本人参加者 37 人に会議での自分の英語の使い方への意識を尋ねるインタビューを行ったが、その他の国の 22 人にもインタビューすることで、日本人の感じる課題の特徴を理解することができた。

29年度は、上記の国際会議の非参与観察を継続すると同時に、仕事上、英語による会議に頻繁に参加する経験を積んできた多様な年齢、職業の日本人ビジネスパーソンに質的インタビューを行った。彼らに仕事上の会議やミーティングに参加してきた経験を振り返ってもらい、彼らを感じた課題、その対応方法、さらに、どうやってより効果的に会議に参加できるようになったかその学びの過程について、半構造化されたインタビューを行った。参加者は、20代から50代まで幅広い年齢を対象とし、多様な業界、職業、専門療育のビジネスパーソンを選んだ。参加者は、男性が18人、女性8人であった。

ELF の国際会議の現場の非参与観察と参加者のインタビューのデータ分析の結果は、国際会議で経過を発表し、その後論文が掲載さ

れた。
ビジネスパーソンの質的インタビューの分析結果と、学びのプロセスの分析は 29 年度に国際会議でテーマをわけて数回発表された。

4. 研究成果

本研究の主な成果は 共通語としての英語によるディスカッションに参加・貢献するための課題の理解、ディスカッション参加者が課題に対処できるように英語のコミュニケーションを学ぶ軌跡の分析、その学びのプロセスを経験学習理論を応用してモデル化して仮説として提示したことの3点である。これらの成果にもとづき、日本の高等教育で英語のディスカッションスキルをどう教えることが効果的か、教育的示唆を提言した。

の課題の理解は、模擬国連など学生による国際会議等を非参与観察し、日本人を中心に多国籍の参加者にインタビューした結果を中心に分析した。ELF で行われる国際会議に参加するには、リスニング力、素早く英語で考えを表現する力、専門分野の語彙などが課題であると指摘する参加者が多かった。さらにこれらの英語力に加え、自らの英語力を最大限に使う実用的コミュニケーション力、心理的な要因に向き合って英語を使っていく意志と、実践的な英語観が必要であることが明らかになった。観察した国際会議における参加者の国籍、言語・文化的背景は多彩で、使われる英語も多様であり、参加者たちの英語力の差も大きい。この中で、日本の参加学生は英語での会議に慣れていない者が多数で、その多くが自分の英語力に対して不十分であると感じており、心理的な阻害要因がある程度感じながら、会議に参加していた者が多かった。

しかし、その多くが国際会議等の経験を積むなかで、不十分と感じながらも、自分のもつ英語力を駆使することで、英語のコミュニケーションを成立させられることを学んでいた。会議等に初めて参加した時には英語で発言することに困難を感じた参加者も多かった。しかし、英語で発言するように自らに課し、学校英語で培った正確さを重視する意識から、自分の考えを伝えることに焦点を移して英語を話すことで、ある程度発言できるようになっていったと、英語を話す際の心理的要因や意識の変化の重要性を多くの参加者が語った。

の学びのプロセスの分析は、の非参与観察に加え、日本人ビジネスパーソンへの質的インタビューで語られた、ミーティングや会

議等での課題と、その課題に対応するための学びを分析したものである。インタビューしたビジネスパーソンの多くも、仕事の会議やミーティングに参加しはじめた時には、会議中に英語が聴き取れない、発言のチャンスがつかめない、思い通りに意見が言えない、などの課題に直面してきた。彼らの多くは、英語の会議に参加する中で自分の経験を振り返り、自分の英語の使い方を分析し、より効果的に会議に参加する方法を工夫しながら、会議に参加できるようになっていった。その過程では、まわりの参加者の効果的な会議の参加の方法を観察して真似たり、不足していると感じる英語力、たとえば語彙や聴き取り等を、自ら学習したりすることが効果的であったと考えている参加者が多かった。

このように、参加者の多くは会議に出席する経験を積みながら、自分なりにある程度英語で仕事ができるようになったと感じるまで、試行錯誤しながら英語を学んできたのであった。

の学びのプロセスのモデル化は、の分析で、国際会議に参加できるようになる過程で、英語を使った会議に参加する経験を積むことが、重要な役割を果たすことが明らかになったことに注目した。このモデル化にあたっては、職業上の学びの研究で広く応用される、経験学習理論(Kolb, 1984; 中原, 2012)を援用した。経験学習理論とは、「具体的経験」、「経験の振り返り」、「経験から学んだこと概念化」、「概念化された新しい方法の実践」のサイクルを繰り返すことで、経験から学んでいく過程を理論化したものである。さらに他者からの学びと、英語の自発的な勉強が重要と語った参加者が多かったことを鑑み、「経験学習」と「他者からの学び」、「自発的学習」を統合した学びのモデルを、ELF ユーザの学びのプロセスの仮説として提示した。

これらの3点の成果をもとに、日本の高等教育において英語のディスカッションスキルを効果的に教えるための教育的示唆をまとめた。まず、英語のディスカッション力を学ぶには、英語の知識に加え、実際に英語でディスカッションをする経験を積むことが重要であり、授業内で学生がディスカッションをする機会を提供することが必要である。ディスカッションでは、コンテンツをわかりやすく伝える実践的な英語の使い方を指導し、正確さに過度にこだわって発言を困難に感じることがないように教えることが効果的であると思われる。

さらに、学生の「他者からの学び」のロールモデルとなるような、英語を使ってきた経験

が豊富なノンネイティブ英語ユーザが教員や留学生として学生のまわりにいることが、彼らの学びをさらに促すと考えられる。

また、学生がディスカッションの経験を積む中で、自分の英語の使い方を自覚的に振り返る機会を設け、より効果的な英語の使い方を考え概念化したり、自分に不足していると感じる英語力を自ら学ぶように動機づけることも、効果的であると考えられる。

参考文献

- Jenkins, J., Cogo, A., & Dewey, M. (2011). Review of developments in research into English as a lingua franca. *Language Teaching*, 44(3), 281–315.
- Kolb, D. (1984). *Experiential learning as the science of learning and development*. Prentice Hall
- Knapp, K. (2002). The fading out of the non-native speaker. Native speaker dominance in lingua-franca-situations (p. 217–244.).
- Louhiala-Salminen, L., Charles, M., & Kankaanranta, A. (2005). English as a lingua franca in Nordic corporate mergers: Two case companies. *English for Specific Purposes*, 24(4), 401–421.
- Rogerson-Revell, P. (2008). Participation and performance in international business meetings. *English for Specific Purposes*, 27(3), 338–360.
- Seidlhofer, B. (2011). *Understanding English as a Lingua Franca*. Oxford: Oxford University Press.
- Takino, M. (2016). *Negotiating the challenges of using English in business communication: Listening narratives of Japanese BELF users*. PhD Thesis, University of Southampton.
- JECET EBP 調査研究特別委員会 (2015). *ビジネスミーティング英語力*. 朝日出版社. 寺内一監修、藤田玲子・内藤永編集
- 中原淳. (2012). *経営学習論: 人材育成を科学する*. 東京大学出版会.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

瀧野みゆき, (2017)「共通語としての英語」による国際的会議への参加と貢献
立教女学院短期大学紀要 49号 pp15 - 37

[学会発表](計4件)

Takino, M (2017) Using Multiple Languages in the Age of English as a Business Lingua Franca (BELF): Bilingual

Japanese Managers' Perspective, The 15th ABC Asia-Pacific Conference, Association for Business Communication

Takino, M (2017) Becoming BELF users: learning to communicate in English at work, “Business and Intercultural Negotiation” Conference, The JALT Business Communication SIG

Takino, M (2017) Becoming BELF users: Transformation to “BELF users” from “English learners”, JACET 44th Summer Seminar

Takino, M (2017) Becoming BELF users: Challenges for professionals who use English as an additional language, 82nd Annual International Conference, Association for Business Communication

6 . 研究組織

立教女学院短期大学

専任講師

(1)研究代表者

瀧野 みゆき (Takino Miyuki)

立教女学院短期大学・現代コミュニケーション学科・専任講師

研究者番号 : 00777930